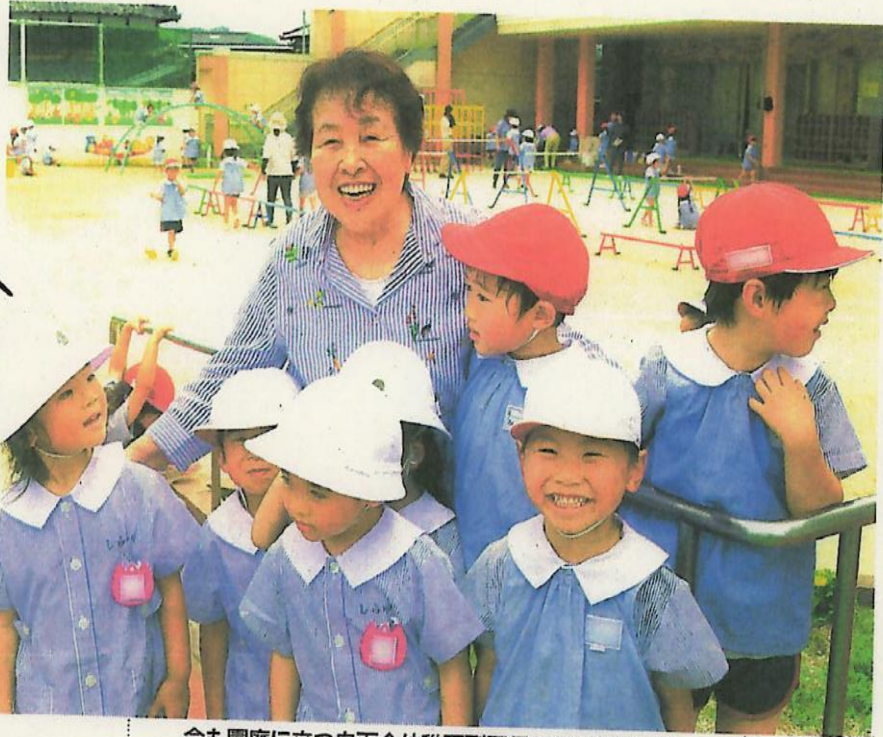


28水70年
記憶をつなぐ

殉職の息子鎮魂の園

生徒避難に尽力 星野中・伊井教諭の父母



今も園庭に立つ白百合幼稚園副園長の柴田信子さん

令和五年六月十九日 西日本新聞

1953(昭和28)年、筑後地方を襲った大水害「28水」で、八女市星野村の星野中生徒の避難に尽力し、4歳の子どもを腕に抱き殉職した伊井史書教諭。その父母が、悲劇をきっかけに始めたのが白百合幼稚園(同

市折橋院)だったことを、伊井教諭の遺影について報じた本紙記事を見た妹の柴田信子副園長(80)が教えてくれた。「白百合は兄が好きだった花。母の兄に対する思いが園名に込められています」と語る。

好きな花の名を園名に 八女「白百合幼稚園」

「昭和28年八女郡水害誌」によると、6月26日午後、降り続いた雨で旧星野金山の土砂をためた鮎澤ダムが決壊した。伊井教諭は生徒たちを集団下校させた後、それぞれ無事帰宅しているかを確認して回る途中で下宿に着替えに立ち寄った際、土砂崩れに巻き込まれて命を落とした。下宿先の4歳の子どもを腕に抱きながら亡くなったという。享年28歳だった。

28水当時は小学5年生だった柴田副園長。「雨がすごかった。矢部川が恐ろしい濁流だったのを覚えています」。伊井教諭は被災から3日後に見つかった。「遺骨を抱えて星野村から歩いて帰ってくる父たちを、橋まで迎えに行きました」と振り返る。

伊井教諭は第2次世界大戦に従軍し、シベリア抑留を耐えた。帰国後、福岡教育大久留米分校に学び、星野中は初任地だった。「厳しい人でしたが、動物好きで草笛が得意な兄でした」。長男だった伊井教諭を亡くし、母マサコさんは小学校教諭を辞めた。翌年、自宅書齋で近所の子ども8人を預かり始め、さらに次の年、夫婦で「白百合幼稚園」を立ち上げた。白百合は伊井教諭が好きだった花。「鎮魂と再起の思いを込めたのではないでしょうかと」柴田さんはおもんばかる。

現在は認定こども園となった同園。昔から変わらぬ保育方針に「健康と安全に気をつける子ども育成」を掲げ、避難訓練を毎月実施している。地震や洪水など災害の種類によって警報を変え、それぞれの想定に基づいた避難方法や避難場所を変えた訓練に取り組んでいるという。

開園から約70年の間に4847人の子どもが巣立っていった。3世代にわたり通う親子も多い。柴田副園長は「母は、教育の基本は『子を思う親の心をくみてこそ』とよく話していた。息子は亡くしたけれども、母の思いは兄に届いているのではないだろうか」。今も同園には約230人の園児が通い、園庭で元気に遊ぶ声が響く。最期まで子どもを思った伊井教諭の遺志は、現在に咲き続ける。(軸丸雅訓)